



唯心齋集



特別
イ 4
3163
47



貴
14
3163
47

松浦伯爵家文庫
樂歲堂圖書

庫名	
部名	
No.	函
No.	架
No.	號

唯心房集

唯心房集



唯心房集は大原三寂の一人たる寂然が集なり。寂然は俗名を藤原頼業といふ。父は木工權頭為忠、母は待賢門院女房橘氏頼業仕へて従五位下壹岐守となる。その生歿官仕並に剃髮の年時を詳にせずといへども風雅集などの歌によりて推すに、崇徳院に奉仕し保元の頃世を遁れしに非るか。抑も為忠は歌人にして丹波守時代に於ても權頭時代に於ても家に百首の會を開きその歌現存せり。子孫歌人、文學者、藝術家を多く出せり。頼業の兄為業は大鏡の作者、弟為隆も歌人にて兄弟三人各髮を剃りて寂念寂然寂超と稱し、共に洛北大原山に隱栖せるは何等の機縁に由りしか。明かならざれども洵に希覯の例たるべし。保元平治以降社會の秩序紊れ彝倫地を掃ふの狀なりし

かげ心あるものは山林に遁れて跡を鞆ましたるもの藪から
す。中にも寂然は情に篤く道心堅固なりしが如し。その親交あ
りし西行が自然に隠るゝに對し寂然は讚佛乘に隠れたるも
の、如し。その全集は傳らざれど千載集以下の勅撰集に收め
られたる作を檢しても厭世的主觀詩人たりしと知るべし。
撰集に載れる詠は作者部類に據れば

千載

六

新古今

四

新勅撰

四

續後撰

四

新後撰

一

玉葉

一

續後拾遺

一

風雅

九

新千載

一

新拾遺

一

新後拾遺

二

新續古今

二

の如く四十六首あり。而してその多くは無常釋教に關するも
のにて自然美を諷詠せるは鮮し。晚鐘又時雨の如き自然に接

しては

つくぐとむなき空を眺めつゝ

入相の鐘にぬる袖かな

(新勅撰)

誰かまた真木の板屋にぬがめして

時雨のあめに袖ぬらすらむ

(續後撰)

の如く悲哀の涙を濺ぎ月夜に對しては

世の中を常なきものと思はずは

いかでか花の散るに堪へまゝ

(千載)

つくぐとことそともなき眺して

今宵の月もかたふきにけり

(風雅)

の如く沈思冥想心眼に映する所を要とし自然の快感を詠ず
るなし。蓋し塵俗を遠かるの情自ら發して諷詠となれるならむ。

唯心房集は舊桂宮御本にて從來世に知られず。今は宮内省圖書寮の藏本たり。鳥の子横本の裂帖にして丁數二十一、筆者を知らずと雖もその時代は決して新しきものにあらず。本書は原本をさながら影寫せるものにて、その内容は首は十重禁戒十法界十如是を詠める短歌三十首を擧げ、次に今様四十九篇を載せたり。不邪淫を詠める短歌の

さらぬだに重きがうへにき夜衣

我つまならぬつまなかさねそ

の如きは院本にも引かれて人口に膾炙せること今更に贅説するを要せず。釋教に關しては別に法文百首詠あり。類從本にも收められて冷く世に知られたれば茲には説かず。唯今様に就きて少しく言を加へむとす。四十九篇は別に部立を記さざり

れど春夏秋冬別戀無常等に叙でたるが如し。その中には朗詠の詩句を譯し若しくは三代集の歌を推衍したるもの少からず。池の涼しき江の歌は源中將英明の池冷水無三伏夏を譯せるもの、王昭君の歌は紀長谷雄の胡角一聲霜後夢をうつせるもの、あるか無きかの世の中の歌は貫之の手に掬ふの短歌をとりたるもの、その他白樂天後相公橘正通及在原業平素性法師清原元輔等の詩歌によりたるもの、あれど單に譯和若しくは模倣に止まらず自家の境地を歌ひたるものあり。真木の炭焼く炭竈の歌の如き別乾坤をなせる穩栖地の風物を詠せるもの、びとりは見まじきの歌の如きは自家の述懐を示せるもの、賀茂の川原にの歌の如き悠々たる雅懷を攄へたるもの等、さすがに諷誦すべきものあり。當時今様流行して後白河法皇

の如きは法住寺殿に於て連夜今様合を行はせ給ひし程なるに、爾餘の歌人の集には殆ど全く之を載せず、ひとり唯心房集に於て斯く多くの今様を見るは恰も砂漠を行く人の泉地を望むの感なくんばならず。この書と梁塵秘抄とは共に完本にあらずと雖も謠はれたる和歌として和歌史上重要なる一地位を占むるものと謂ふべし。吾人は嘗て今様の沿革に關し若竹の記者に對し、この集を取出でて語りたることあり。その縁故を以て本書の解題をものすることとなりたれば、蕪辭を屬して卷首に題し、併せて撰集に見えたる法師の詠を抽きて卷末に附し、觀覽に便せむとす。

大正五年十一月 鬼子女神祠畔の僑居にて

福井久藏 誌す

唯心房 寂然 作也



十重禁戒

不敬生

わつこのちくまにけむあ
まらせしむるいあむあ
成もあよ

不偷盜

いふふれむらむらむら
ううれたむらむらむら
えつれと

不那嬢

さうぬしにおもさうりつに
さしあつさつわつしあつらぬ
かしのさつね

不妄語

おらのさつはくさつあつ
さつあつあつあつあつあつ
あつあつあつあつあつあつ

不酤酒

あつあつあつあつあつあつ
あつあつあつあつあつあつ
あつあつあつあつあつあつ

不説に衆過

あつあつあつあつあつあつ
あつあつあつあつあつあつ
あつあつあつあつあつあつ

不自讚歎他

もろみはな人哉とていせはい
れちねのうつりて——つむ
もねとていこうきう

不慳貪

わんてはぬ——好よあれ
うらなれはあれようふふ
あつと——つむ

不瞋恚

あつたにうら人ともあつとて
ふれとのれはあれき——つむ
うおあふ

不謗之實

もろみはな人哉とていせはい
れちねのうら人ともあつとて
あつたにうら人ともあつとて

天

うたかたのたれはれのかくさおと
うたてけいしんしんかきかき

教

うたかたのたれはれのかくさおと
うたてけいしんしんかきかき

縁

うたかたのたれはれのかくさおと
うたてけいしんしんかきかき

菩薩

うたかたのたれはれのかくさおと
うたてけいしんしんかきかき

佛

うたかたのたれはれのかくさおと
うたてけいしんしんかきかき

十如星

相

~~~~~

~~~~~

性

~~~~~

~~~~~

律

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

カ

~~~~~

~~~~~

佐作

~~~~~

~~~~~

固

~~~~~



まゝにたしなむしうらぬ  
れいぬとんれいしうらぬ  
あつとくういん

縁

いほれくたふしうらぬ  
うらぬとんれいしうらぬ  
さつとくういん

果

ほろいけいあまのさつとく  
うらぬとんれいしうらぬ  
さつとくういん

報

あつとくういん  
さつとくういん  
いん

本末究竟未

とくういん  
さつとくういん  
いん











あはれなるをばらばらとて

あはれなるをばらばらとて

あはれなるをばらばらとて

あはれなるをばらばらとて

あはれなるをばらばらとて

あはれなるをばらばらとて

あはれなるをばらばらとて

あはれなるをばらばらとて

あはれなるをばらばらとて

あはれなるをばらばらとて

あはれなるをばらばらとて

あはれなるをばらばらとて

あはれなるをばらばらとて

あはれなるをばらばらとて

あはれなるをばらばらとて

あはれなるをばらばらとて

あはれなるをばらばらとて

あはれなるをばらばらとて

あはれなるをばらばらとて

あはれなるをばらばらとて











Handwritten text in Arabic script, consisting of several lines of cursive writing.

Handwritten text in Arabic script, consisting of several lines of cursive writing.







翠楼紅圍さほくに

万事れ礼法こと

あつと

浮生ゆめらし

きくおねと

ゆめの

うらたて  
うらたて

蓮葉洞のくねの

まき長杖腹丸

うらたて  
うらたて

うらたて  
うらたて  
うらたて

うらたて

うらたて

うらたて

うらたて

うらたて

うらたて

うらたて

うらたて

うらたて

うらたて



こはなはな

いんじん

あぢあ

まにまに

いんじん

あぢあ

いんじん

あぢあ

いんじん

あぢあ

風まふ

あぢあ

いんじん

あぢあ

いんじん

人まふ

あぢあ

いんじん

あぢあ

あぢあ

いんじん

あぢあ

あぢあ

いんじん



あつにちしきいものか

まゝのあつたふのくれ

川もいさかすうもあつ

ふけのあなはゆちよ

まひり  
むのいのら

よゝし頼駒こまら川よて

と代まきしうーつこ

ぬれ

伝書むしーの主徳のま

われとまうせたら

ぬて

あついのまゆいづち

まゝくまゝいぢい

ゆくまて

の万四千の

ねまゝあちま

まぬれこせ

まゝくまゝ



ほろろはこふれおや

こして産生ふれれ

「よなめちう」ちい

の

あつれちうに

ふと

産生のまらふのふ

まはらちうれ

うらちうい

ま

ふられちうのふね

なはめちうい

うらちうい

うらちうい

うらちうい

うらちうい

うらちうい

うらちうい

うらちうい

うらちうい



聖徳太子は觀を音

大慈方便を以て

我々の佛法

なりけり

とて

妙法蓮華

經

弘經の太子はにほはれと

天の智者に

守れ

前代末回の摩訶

正觀

いふちよ

むちえは



いんげんいんげん

やまのなほ靈乾也

鶏とく天とら山

文珠のいんげん

清涼山真言を

るまら

高野のや

よ

真如乃好理成ら

ぬれらるるもよほ

まじりはも

くはくは

唯佛の

きんぎょのわさか



附録

千載集

初秋の心をよめる

秋は來ぬ年もなかけにすぎぬとや萩ふく風の驚かすらむ

西住法師身まかりける時をけり正念なりけるよ

聞きて圓位法師の許につかけしける

亂れすときをばり聞くこそ嬉しけれさても別はなくさまね  
とも

題しらす

陸奥の忍ふもちすり忍ひつゝ色には出て亂れもそする  
題しらす



世の中を常なきものと思はすはいかてか花のちるにたへ  
まゝ

世を背きて又の年の春花をよめる

この春をおもひはかへすさくら花空しき色にそめし心を  
火盛久不燃といへる心をよめる

煙たにしけたなひけ鳥邊山たち別れにし形見とも見む

新古今集

雪のあした大原にてよみ侍りける

尋ねきて道分けわふる人もあらし幾重もつもれ庭の白雪

題しらす

ことしけき世を遁れにしみ山への嵐のみせも心して吹け  
人々勤めて法支百首の歌よみ侍りけるに二衆但空

智如螢火

道のへの螢ばかりを知るへにて獨りそ出つる夕やみの空

菩薩清凉月遊於畢竟空

雲けれてむなしき空にすみながら浮世の中をめぐる月影

梅檀香風悦可衆心

ふく風に花橘や匂ふらむ昔おほゆるけふの庭かな

作是教已復至他國

闇深きこのもとことに契りおきて朝立つ霧のあとのつゆ  
けき

此日已過命即衰滅

けふ過ぎぬ命もしかとおとろかす入相の鐘の聲を悲しき  
棄息入無爲



背かすはいつれの世にか廻りあひて思ひけりとも人に知  
られむ

聞名欲往生

音にきく君かりいつかいきの松まつらむものを心つくりに

心懷戀慕湯仰於佛

別れにしその面影のこひしきに夢にも見えよ山の端の月

十戒の歌よみ侍りけるに不殺生戒

渡つ海の深きに沈むいさりせてたもつかひある法を求めよ

不偷盜戒

浮草の一葉なりとも磯かくれ思ひなかけそ沖つ白波

不邪淫戒

さらぬたに重きか上のさよ衣わか妻ならぬつまな重ぬそ

不酤酒戒

花のもと露のなさけはほともあうし酔なす、めそ春のや  
ま風

新勅選集

勸發品受持佛語作禮而去

ちりくに鷺の高嶺をおりそゆくみのりの花を家苞にして

悲鳴啣咽痛戀本群といへる心をよめる

立けなれ小萩か原に鳴く鹿は道ふみまとは友やこひしき

十如是の心をよみ侍りける本末究竟等

小笠原あるかなきかの一ふしに本も末葉も變らさりけり

題しらす

つくくと空しきそらを眺めつゝ入相の鐘にぬる袖かな



續後撰集

八月十五夜によみ侍りける

名に立て、秋の半ははこよひそと思ひかはなる月の影哉

題しらす

誰か又まきの板屋にねぎめして時雨の音に袖ぬらすらも

十戒の歌詠み侍りけるに不自讃毀他

最上河人をくたせは稻舟のかへりて沈むものごとそきけ

相空法師身まかりけるに西行法師とふらひ侍らさ

りけれは

とへかくな別の庭のつゆふかき逢かもとの心ほそきを

新後撰集

弘決秋九月從慈始入天台といふ心を

長月の有明の月ともろともに入りける峯を思ひこそやれ  
玉葉集

寂然大原に住み侍りけるに高野より山ふかみとい

ふことを上におきて十首の歌よみて遣しける中に

西行法師山深みなるかせきのけ近さに世に遠さ

かる程そ知らるしこの返事に大原の里といふらと

を下の句におきて又十首よみて遣すとて

ひよりすむおぼろの清水友とては月をそやとす大原の里

續後拾遺集

十戒の歌よみ侍りける中に

長き夜をいかにあはれと照らす空さそらにすめる月影

風雅集



秋の歌に

木枯に月すむ峯の鹿の音を我のみきくは惜しくもある哉  
讃岐より都へのほるとて道より崇徳院に奉りける  
慰めに見つゝも行かば君かすむそなたの山を雲を隔てそ  
春の頃天王寺へ参りてよみ侍りける  
心ありて見るともなき難波江の春のけしきは惜しくも  
あるかな

思ふ事ありける比

つづくこと事そともなきなめして今宵の月も傾きにけり  
諸共に世を背きなむと契りける人に心ならずな  
らふるよしをいひてはかなきは今日とも知らぬ世  
の中にさるともとのみ何時をまつらむの返

思ひ知る心とならば徒らにあたらこの世を過ぎらなむ

速懐の心をよめる

何事をまつことにては過ぎまゝ憂き世を背く道なかりせば

題しらす

稻妻の光のほとか秋の田のなひく末葉の露の命は

相空法師身まかりて侍りけるを西行法師とはす侍

りければ數多よみて遣しける中に

いか、せむ跡のあはれはとはすとも別れし人のゆくへた  
つねよ

父七くなりて後日數も残り少くなりて侍りける頃  
君に我後る道悲しきげ過ぐる月日も早きなりけり

新千載集



大原に住み侍りける頃藤原爲業まうて來むとのみ  
申して見えさりけるかたましくまうて來りけるに月  
をかき所とて外に宿りければはいひ遣しける  
待ち得たる雲居の月も宿らねは臙の清水すむかひそなき  
新拾遺集

普賢品我心自空罪福無主

かつまたの池の心は空しくて氷も水も名のみなりけり  
新後拾遺集

妙音品

隈もなき月の光に誘はれて鷺のみ山をさして來にけり  
十戒授くるを聞きて詠める

先の世のむくいと聞けと身のうさに思ひこるへき心地こ

そせね

新續古今集

提婆品の心を

何となく涙の玉やこほれけむ峯の木のみを捨ふたもとに

自雖遠離心不遠離といふ事を

身の爲と思ひて出てぬ道をれば心は人を背きやはする







